特集 JCメディア印刷部会50周年

精神は「Facebook」

今年50周年を迎える公益社団法人日本青年会議所の部会の1つ、メディア印刷部会（JCメディア印刷部会）は1963年に印刷部会として発足し、2005年にはデジタル化時代に対応すべく現在のメディア印刷部会へ改名、印刷業界だけでなくメディア関連業界の参加も得て参加層を強化しながら現在に至り、7月13日には50周年記念式典を挙行する。そこで日本印刷新聞はOBと現役会員にお集まりいただき、JCマンとしての誇りや思い出、これから目指すべき方向性などについて聞いた。

社会を教科書に学ぶ

リーダーの宿命背負い

21代部会長
紫紅印刷㈱社長
新里時夫氏

現役時代は日本JCの指導力開発委員会で総括幹事を務め、毎月の会合では132人の委員の運営を管理していた。そうすることで全国にたくさんの仲間ができたし、イベントの企画・設営を自ら担うことによって多くの学びがあった。単年度の組織が協力し合いベストを尽くす、この繰り返しによりJCマンには結果を出すためのノウハウがトレーニングされる。

そのころ、父と親交のあった水野雅生先輩（14代部会長）の下、年1回開かれる業種別全国大会をお手伝いして印刷部会へも自然に入会した。印刷部会の会長を引き受けることになった時、北島義俊先輩が自社の大日本印刷の大会議室に諸先輩を集めて激励会を開いてくれたのが思い出深い。

部会長に就任したころ、東京プリンスホテルで東京青年印刷人連絡会（東京青年印刷人協議会＝東青協の前身）が「DTPをぶっとばせ」のタイトルで大規模な勉強会を開いた。勉強会には部会長として出席したのだが、この時に当時の全印工連の松島会長から、組合青年会の活性化に力を貸してほしい、と持ちかけられ、協力することとなった。

JC出身者はそれぞれの場所でリーダーとならなくてはいけないし、それができる仲間だと思っている。東青協の副議長となり、2年後に議長へ就任した時に全国青年印刷人協議会（全青協）をつくった。地区ごとに選出する副議長へはJC印刷部会の仲間に就いてもらった。JCの仲間は誰もが組織運営のノウハウをトレーニングされたメンバーであり、こちらの考え方を伝えるだけで運営から動員まですべて計画を立てて進めてくれるので安心して任せられた。JCの仲間の素晴らしさを実感した。われわれ印刷部会と全青協、緑友会とで行事の際にはお互いのトップが出席することを決め、青年会の枠を超えた交流が生まれた。

JCは大変良い会だと思っているが、長く続いているだけに歴代OBと現役世代との接点が生まれにくくなってきたようだ。多様な業種の仲間が集まるからこそ、利害関係がないところで密度の濃い駆け引きなしの本音の付き合いができる。仕事に関することなら、昔の方がJCメンバーを活用していた。

今は多様化の時代を迎え、インターネット検索など相談するチャンネルが増えている。便利なものは利用すればいいのだが、せっかくのメンバーとノウハウが集まっているのだから、実際に顔と顔を合わせて仕事だけでなく生き方についても話し合えば、経営者として、人間として、もっと豊かになれるだろう。

相談役／25代部会長
㈱金羊社社長
浅野健氏

金羊社に入社以来、主に営業職に携わっていたが、当時の自分にとって印刷業とは、自社の営業環境だけがすべてだった。それがJCに参加したことで、他府県の仲間との交流が生まれ、それぞれの地域の状況に接するうちに、印刷業とはこんなにも深遠なる仕事なのだということを知った。

これまで全日本印刷工業組合連合会（全印工連）をはじめ、さまざまな業界団体からもお役を拝命してきた。JCで学んだことの中でもっとも大きな影響を受けたのは「不易流行」の視点。キャビネット（執行部）が単年度制であることで組織が毎年生まれ変わる。何を変え、何を変えずに継承していくのか、自らの力で物事の本質を見極める姿勢を学んだ。それらが卒業してから業界団体のリーダーとしてさまざまな課題に直面する時に新たな気付きを与えてくれた。

私にとってJCとは、同業の方を含めて仲間がいるありがたさを教えてくれた母校である。ここの存在意義とは、「社会を教科書に学び、高い志を構築する場所」であること。メディア印刷部会を含めた業種別部会において、ほかの青年団体と交流することはもちろん大切だが、それ以上に「JCらしさ」にこだわってほしい。何かを発信することだけでなく〝集う〟こと、そして〝JC学校〟の同級生であることを誇りにしてほしい。難しく考えずに仲間と顔と顔を合わせながらつながり合う中で「遊び心」を育てることだ。

「変革の能動者」たれ

ネットワーク有意義に

32代部会長
萩原印刷㈱社長
萩原誠氏

お客様でもあり日本青年会議所の会頭まで務めた前田完治氏から「JCという若手経営者のトレーニングにふさわしい場がある」と紹介いただいたのが入会のきっかけ。38歳の時、当時の印刷部会長だった新里先輩から、東京で部会長を選出するのでぜひ引き受けてほしいとのお言葉をいただき、お受けすることとなった。業界青年部のさまざまな他団体と違い、印刷部会には印刷、資材関係、製本・加工といったさまざまな業種が参加しており、広い視点とネットワークが新鮮で大いに刺激を受けた。

1993年ごろ、メンバーの誠伸商事㈱が「印刷会社のためのホームページ勉強会」を開いてくれた。それからインターネットビジネスの可能性を自分の目で確かめたくなり、ニューヨークへ飛んでホームページやウェブサイトを手がける企業を視察した。同じころ、オンデマンド印刷が話題となり、渡邉一正氏（36代部会長）とゼロックスの案内でロサンゼルスの企業を視察したこともあった。

JCの仲間はチャレンジ精神が旺盛で、事業に対して情熱的で積極的、人としての魅力にあふれている。地域おこしやクロスメディアといった新しいビジネスをキャッチするアンテナ感度が高いだけでなく、キャッチした情報を租借して自分のビジネスへ取り込む能力にも優れている。さまざまな事業を通じて人と人とのネットワークの築き方や運営・実行のノウハウを身に付けてきたからこそである。卒業してから全印工連業態変革推進企画室で委員長となり全国を訪問していたが、各地でJC出身者がリーダーとして活躍していたので話がシームレスに運んだ。

JCには〝頼まれたら断らない〟という暗黙の約束が打てる」と言ってくださった。真剣に向き合った分だけ手応えがある、誠実に丁寧に、一生懸命取り組めば、必ず人は評価してくれる。痛い目に遭いながらもチャレンジする仲間を見ていると、自分も負けるものかと奮起させられエネルギーと元気をもらえる。

せっかくのすばらしいネットワークがあるのに活用しなければ何のために忙しい時間をやり繰りし、社員に負担をかけてまで参加しているというのか。そういう気構えで臨むべき。ここにはもっと新しいことへチャレンジできる人間が集まっているはず。後輩たちにはすごく期待している、こういう会に属していることを自覚し、JCマンとしてのプライドを持とう。

そして、先輩にも頼ってほしい。その点で昔のメンバーは遠慮がなかった。世の中の風潮かもしれないが、現役世代はみんなスマートで謙虚、変に気を遣いすぎていないか。先輩としては、もっとぶつかって頼ってくれるとうれしい。日本の社会は先輩・後輩の縦社会で成り立っている。このことを改めて思い出させてくれるのがJCである。

人と人とが顔を合わせるコミュニケーションに勝るものはない。確かに昔に比べて今は人間関係は希薄になっているかも知れない、だからこそ50周年を機に皆で集まり、もう一度それを確認し合おうではないか。

35代部会長
㈱TONEGAWA社長
利根川英二氏

32歳の時にJCへ入会していたが、印刷部会はマイノリティーであったし、JCに入ってまで同業者と交流する必要を感じていなかった。ところが当時、東京の印刷部会は人材不足で存続の危機にあり、部会長だった萩原先輩から都内JCの印刷業メンバーに急きょ招集がかかったため、自分も渡邉一正氏らと印刷部会へ参加することになった。

JCと違い印刷部会には自ら門戸を叩く人は皆無だったが、実際に活動してみるとメンバーの誰もが参加することで自己の成長に手応えを感じられる場所だった。その充実感が人を呼び、福田和也氏（38代部会長）、村田淳氏といった資機材関連のメンバーも入会してくれたことでさらに層が広がっていった。こういう理念を共有する仲間のネットワークは強い。それが現役世代では希薄になっているのがとても残念に思う。

JC出身者というのは、常に変革の能動者であり、突撃隊長であった。そして、自社の経営にはJCの組織運営のノウハウを応用しているものだ。今の全青協や東青協は新里先輩をはじめわれわれのOBが創設に携わり、議事進行や協議の方法というJCのノウハウを落とし込み組織の形をつくっていった。つまり、現在ある青年団体に大きな影響を与えたのがJCである。そういった意味で、現役メンバーはもっとJCマンの誇りを持っていい。

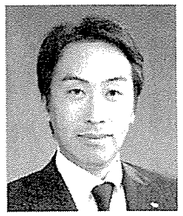
浅野先輩は「40代ならまだ撃沈しても立ち直れる。物おじせずに挑戦してほしい」とおっしゃった。せっかくならば自ら松明を持ってパイオニアになれ、ということだろう。私は今、街おこしネットワークの「マーチング委員会」を主宰しているが、JCで得たことが大きな糧になっている。全国各地のどこで講演しても出身者はマーチング委員会の理念や趣旨をすぐに理解してくれる。JCもマーチング委員会も理念共有型の活動、地域と国境を超えて分かり合える。

JCの組織ですばらしいのは、40歳定年制と単年度任期であること。だから自然と組織も考え方も新陳代謝がある。できない理由を考えるより、まずやってみろという教えだ。

現役時代に理事を引き受けるか否かで悩んだ時、浅野先輩が「JCの活動は全力で参加すればそれだけの価値がある。OBを打っても必ずリカバリーショット

トレーニングの場

メンバー同士強い〝絆〟



50代部会長
㈱アイ・アンド・シーパートナーズ社長
杉山純一氏

メディア印刷部会へ参加するようになったのは2008年ごろ、仙台で当時の現役会員だった鳴海幸一郎先輩にお誘いいただいたのがきっかけである。メンバーが減少傾向の印刷業界のみを対象とした「印刷部会」から「メディア印刷部会」へと名称を変え、広告代理店、Web系企業などへ対象を広げて、活動を充実させていくとのことで、自分自身が広告代理店とWebの会社をやっているのもあり興味を持った。

JCとは、様々な交流の中から現役会員が自社の仕事の糧となるものをつかみ、それぞれが仕事上のスキルを活かして地域へ貢献できるリーダーへと成長していくためのトレーニングを積む場所である。印刷業界ではない分野から部会長へ就任した自分としては、メンバーが活動を通じスキルアップすることで自社の事業へのフィードバックが可能となるような事業や例会を企画し、近年入会した広告代理店業、Web業の現役メンバーが当部会に興味を持ち、メディア印刷業界が新たなコラボレーションを創造していけるチャンスを提供したいと考えている。

青年会議所のバッジとネームプレートを付け、その一団体と名乗る以上、業種別部会もJCが推進する運動を推し進め、『明るい豊かな社会の実現』を目指さなくてはならない。業種別部会の立場としては、自分たちの仕事で得た知見を活かし、地域のリーダーを育成するトレーニングの場でありたい。

50周年事業実行委員長
㈱シーティーイー社長
藤田陽司氏

JCに入会したのは約1年前、もともと一般社団法人東京ニュービジネス協議会（NBC）へ参加しており、そこで東京JC歴代理事長である西村剛敏氏よりお誘いいただいた。入会後は自社が東京都文京区にあるため文京区委員会へ所属した。文京区委員会OBの利根川先輩のご尊父が他界され、文京区委員会として葬儀のお手伝いをしたのが最初の活動だった。

利根川先輩とは以前から別の場所で面識があったのだが、JCに入会したことを話すととても喜んでメ

謝され、常に新しい発想が生まれてくる。それぞれの組織でピラミッドを形成していて世の中の動きが俯瞰できるし、礼節と礼儀を重んじながら縦糸で脈々とつながっていける。

自分が信じたことをやり続けるのが変革者である。大きく変化を続けるこの時代だからこそ、自らリーダーシップを発揮して真剣に新たなビジネスモデルを構築してほしい。地域社会や国にとって絶対的に必要とされる存在として新たなビジネスモデルをつくっていくのがJCの役割である。JCの理念を共有しながら変革の能動者としていろいろな場所へ分散し、他団体へ水平展開してほしい。

44代部会長
㈱オフィスエム社長
田上睦深氏

初めて参加した時は綱領唱和に「良い大人が何をしているのだろう」とカルチャーショックを受けてしまい、すぐに溶け込むことができなかった。ところがJCには良い意味での〝おせっかい〟な人がたくさんいて（笑）、会合への出席を迷っていると必ず電話をくださった。それだけ面倒見が良く親身に向き合ってくれる先輩方がいたことに今でも感謝している。女性の視点で見ると、JCに参加することで日本の男性社会の構図を学ぶことができ、貴重な経験となった。

JCでは電気情報部会にも入っていたが、メディア印刷部会は諸先輩を見ても、もっと新たなビジネスに挑戦しようとする積極性や活気があった。メンバー同士の年齢も近く親しみが持てた。IT業界に身を置く私にとっては、印刷の技術や資機材について理解が深まり、仕事の上でも生き方の面でも可能性が広がっていくのを実感している。

IT業界の視点で考えても、紙は決してなくなることはないだろうが、その役割は大きく変わる。やはりデジタル化への対応は避けて通れない。時代の変化を危機と捉えるか、楽しみながら向き合うのか。ITは若い業界だが、印刷には長い歴史がある。その受け継がれてきた知恵にIT業界も学び、融合していくことができれば、もっと明るい未来が見えると思う。メディア印刷部会という仲間の多様性に目を向け、OB・現役が協力し合いながら、この大きな変化の時代を乗り越えていきたい。

ィア印刷部会へ誘ってくださり、業種別部会もあることが分かった。メディア印刷部会のOB会である東京JCの会合に同席させてもらうと、メンバー同士が強くつながり合い、ただの印刷会社の社長の集まりではない、もっと面白そうなことをやっている所だと感じてメディア印刷部会へも参加することを決めた。OBの東京JCと現役のメディア印刷部会が別の組織であることは半年前に分かったことだが。東京JCに同席した時にメディア印刷部会が50周年を迎えることを聞き、実行委員長に任命された。JCの何事も〝断らない〟不文律を聞いていたので素直に引き受けた。

やはり、ここで活動するからには自ら実行部隊となるべきだと思う。この事業はどうすれば上手くいくのか、必死に考えることで、その試行錯誤から得るものがどれほど多いことか。自社でもJCで学んだ会議の進め方を取り入れ、従来とは違ってはっきりとした議題に基づき、ブレインストーミングではない、建設的な話し合いが持てるようになっている。まさに経営者としてのスタンダードを学ぶ場がある。

NBCには卒業がない。ニュービジネスに挑戦している人なら誰でも参加できる。一方、JCの場合はビジネスありきではなく、ビジネス以前に基本となる〝人〟の部分が養われる。若くて考え方が固まっていない20代、30代にはぜひJCの活動を経験してほしい。自分ももっと早く入会したかったような気もするが、きっと37歳で入会し卒業まで残り少ないからこそ密度の濃い活動をしようと思えたのかもしれない。